

さいたま市立上小小学校 8、9月号

令和7年8月27日



上小小だより

〒330-0855 さいたま市大宮区上小町 1337-1

HP <https://kamiko-e.saitama-city.ed.jp/> TEL:048-644-6251

教育目標

- ◎心豊かな子
- ◎進んで学ぶ子
- ◎健康な子



花壇のひまわり

2 学期がはじまりました

校長 大島 恵美

夏休みも終わり、閑散としていた学校に子どもたちの明るい笑顔と元気な歓声が戻ってきました。長い休みならではの貴重な体験・経験を積んだ子ども数多くいるのではないのでしょうか。夏休み中、保護者や地域の皆様が子どもたちを温かく見守ってくださったおかげで、無事に2学期を迎えることができました。心より感謝申し上げます。

この夏も「異常気象」と報道されるほど、体調管理に十分な配慮が欠かせない猛暑の日が多くありました。35℃以上の日を「猛暑日」と呼ぶようになったのは2007年ですが、当時と比べてもその日数は増えており、年々暑さが厳しくなっていることを実感します。そんな中でも、朝夕の風に虫の声が混じり、少しずつ秋の気配が感じられるようになりました。まだ残暑は続きますが、季節は確実に前へ進んでいます。

私は夏休みを利用して、現在の一万円札の『顔』である渋沢栄一のゆかりの地を巡りました。夫の実家が渋沢栄一の生家の近くにあり、また、栄一の従兄弟で富岡製糸工場の初代工場長を務めた「尾高惇忠」の家の隣でもあります。久しぶりに訪ねると、文化財である隣家には立派な駐車場や案内看板が整備されていました。今や大河ドラマや新しい一万円札の影響で、多くの人が訪れる場所となっています。

深谷市民にとって、渋沢栄一や尾高惇忠は子どものころから身近で大切な偉人です。栄一は『論語と算盤』という名著を残しましたが、その『論語』を学んだのは、惇忠が自宅で開いた「尾高塾」でした。そこでは「読みたい本、面白そうだと思った本から読むのがよい」という自由な学び方が大切にされていたといいます。尾高塾の教えは、ただ本を暗記したり知識を詰め込んだりするだけではありませんでした。惇忠は「本の一字一句を覚えるよりも、たくさんの本を読んで、自分で考え、実際に使える力をつけることが一番大切だ」と考えていました。これは、今の学校で大切にしている「自分で調べて考える」や「みんなで話し合って学ぶ」とことと、とてもよく似ています。知識を「知っている」だけでなく、「使える」ようにするための実践的な学びだったのです。惇忠の生涯や影響力に触れ、教育の大切さを改めて感じました。

2学期は、学習に加えて多くの行事があり、子どもたちが力を大きく伸ばせる時期でもあります。一人ひとりが目標を明確にもち、達成に向けて歩みを進められるよう、学校として全力で支えてまいります。そして、私たち教職員も子どもたちとともに読書に親しむなど、心豊かな時間を積み重ねていきたいと思っています。